

# そよ風

第1号

今治市立立花中学校



新しい出会いに期待と不安の4月。気持ちよいスタートを誰もが望んでいることでしょう。皆が安心して学校生活を送れるようにするには、何が大切でしょうか。

私は仕事を終え、通い慣れた駅のホームにいた。そこに杖を持った青年の姿があった。おそらく目が不自由なのであろう。まもなく電車が到着した。私は一本後の電車に乗る予定だったので、その青年の様子を見守っていた。乗車時に青年のすぐ後ろにいた若い女性が、人に押されて足元がふらつき、誤って青年の杖を蹴ってしまった。彼女はそのことに気付かず、そのまま電車に乗り込もうとした。その瞬間、青年に背中のリュックを引っ張られ、ホームに引き摺り降ろされて地面に叩き付けられた。そして、その青年が言いました。「俺の杖を返せ！お前が蹴ったから俺は電車に乗れなかったんだ。謝れ！杖を返せ！」と。そして青年は、その場を立ち去った。

電車が行った後、オロオロする彼女を見かねた会社員らしき男性が、駅員を呼びに行ってくれたのですが、後発の列車が3分ぐらいで到着するので、かまってもらえなかったようです。彼女は、「悔しい、悔しい」と言って泣いていました。それを見た私は、彼女に寄り添って一緒に涙を流し、ただただ「きみは決して悪くはないですよ。泣かないで下さい。」と告げることしかできませんでした。私はとても残念で悲しい気持ちになりました。青年を呼び止めて、彼女が青年の杖を蹴ってしまった理由を私が説明していればよかったのか。今回の誤解から生じた出来事で、私は少なからず自己嫌悪に陥りました。

これからの高齢化社会、誰もが身体の不自由を感じる時代になるはずですが。若くして光を失ってしまったのであろう、その青年に奇麗事を言うつもりはありませんし、彼の人生を知らずに、決して偉そうなことは言えません。きっと、健常者には理解し難い、辛い経験を重ねて来たことと思います。しかし、だからといって他人を傷つけることは許されないことです。青年に一言お願いするならば、目の光は失っているとしても、人を思いやる心の光だけは見失なわないでほしいと。

(エッセイ集<詳細は不明>より引用。一部改作)

「相手の気持ちになって考える」「自分がされて嫌なことは人にしない」など、幼い頃から親や先生からよく聞かされた言葉。分かっている、逆のことをしてしまったり、後になって後悔したりすることも。

もう一度、「思いやり」について、誰かと一緒に考えてみましょう。

